

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十一回）

けんしらぎし

「遣新羅使と万葉集（その6）」

わくま うら

（分間の浦の歌）

- ・天平八（七三六年）晩夏六月に遣新羅使一行は筑紫を経て新羅を目指し難波津を出航した。最初の航路である瀬戸内海は潮汐の干満差が大きく、狭い水道や瀬戸等が多く地形が複雑であるため、いくつかの港などで潮待ち、風待ちなどをして航海している様子が万葉集に詠われている。
- ・遣新羅使一行の旅は本シリーズの前回（第五十回）に掲載した熊毛の浦（室津半島Ⅱ山口県柳井市付近）までは使人たちの歌から推して平穏な旅であったと思われる。

- ・「万葉風土記」には古代に使用していた木造（帆）船で海を航行する秘訣について「帆船で海を安全に航行するには、潮の流れと風を上手く利用することである。潮の流れは時間と方向が決まっています、それをわきまえておれば、目に見えぬ潮流は常に帆船の友であり協力者である。一方、風は静かな追い風であれば潮流にまさる最強の友人であるが、強い横風と暴風は帆船にとって悪魔以外のなにものでもない。」と記している。

- ・現に瀬戸内海を西航し筑紫に向かっていた遣新羅使一行の最初の不運は山口県の「熊毛の浦」を出航して間もなく佐婆の海中（現防府市沖合・周

防灘の海上)に差し掛かった時に逆風に遭い漂流の憂き目にあったことである。

・このことについて万葉集卷十五―3644〜3651の題詞に次のように記される。

「佐婆さばの海中わたなかで逆風に遭い、大波にもまれて船団は漂流し、一夜をすごした後、幸いに順風を得て豊前とよくにのみちのくちしものみけのこほり国下毛郡わくまの分間の浦に到着した。」とある。

・題詞にある「佐婆わたなかの海中(＝海上)は九州の入口にある門司港から約50キロ東に離れた山口県のほぼ中央に位置する防府市の南沖合付近の、周防灘(山口・福岡・大分県の3県にまたがる瀬戸内海最西部の海域)の一部を指す。」

・また、新羅使船団が漂流し到着した「豊前国下毛郡の分間の浦」の位置については、大分県中津市(教育委員会)によると、今までの調査などの結果、近世の干拓によって土地の状況は大きく変化したが、一行が逆風に遭った佐婆の海中から約50キロ離れた周防灘南西岸にある大分県の北西端で福岡県との境界に位置する中津市の市街地からさらに東方に4キロ程離れた周防灘に面する「大分県中津市田尻字西新開」あたりの田園地帯に推定されるとの説があり有力視されている。西新開はJR日豊本線東中津駅の北方約二キロの周防灘に面する中津港付近に位置する。

(写生地) 付近に「分間の浦」が位置したとの説がある周防灘に突出した中津港入口岸壁一帯と背景に大分県北東部にそびえる国東半島の山々を中津市田尻の周防灘海岸道路からを描く。(杏花)



- ・佐々木均太郎著「二豊路・万葉をたずねて」には遣新羅使・一行は漂着した「分間の浦」で船の故障や使人たちの心の痛みをたてなおすため10日間くらいを過ごしたのではあるまいかと記される
- ・万葉集には、分間の浦に停泊した時に漂流して苦しかったことを思いだして嘆き悲しんで作られた歌が掲げられている。

みことかしこ

おほぶね

ゆ

1) 大君の命恐み 大船の行

やど

「きのまにまに 宿りするかも」

卷十五—3644

作者・雪宅磨呂

ゆきのやくまろ

(解説) 大君の仰せを謹んで承り、大船のいくままにやって来て、ここにやどることである。

・「大君の命恐み」というのは、大君の仰せをかしこまり承って。

うらみ

ここ

2) 浦廻より 漕ぎ来し船を

みうら

風早み 沖つ御浦に 宿りする

かも

卷十五—3646

使人

(解説) 浦辺伝いに漕いで来た船だが風が荒くて沖合いの浦で仮寝することだ。

(参考文献) 猪俣静弥著「万葉風土記」日本古典文学「万葉集」林田正男著「万葉の歌」他

(写生地) 中津港に続く海岸から200mほど離れた中津市田尻地区に鎮座する賀茂神社境内から古代の「分間の浜」であった地と伝えられる近年、干拓された田園と松林。遠方に国東半島の山々を描く。(杏花)

分間の浦・佐婆の海などの位置図



(位置図)

